

台北二二八和平紀念公園周辺

片倉 佳史

台湾の首位都市として君臨する台北市。名実ともに台湾の中核となっている大都市である。その台北の歴史をたどる旅。今回は戦前、多くの日本人が暮らしていた城内地区の中から旧台北新公園（現台北二二八和平紀念公園）を中心に紹介してみたい。

台北駅の正面を走る表町通り

前回、紹介したように、地下化工事が進められる以前の台北駅は現駅舎の西側に隣接していた。旧駅舎は1930年代から流行したモダニズムの流れを汲んでいた。外観は簡素なデザインで、耐震構造を施した堅固な建物であった。

この旧駅を継続的に使用し、東隣りに現在の駅舎が造営された。新駅舎は古代中国の宮殿をイメージしたと言われ、どこからでも目に付く壮麗な建物となっている。

旧駅舎は駅前広場を含め、一切の痕跡を残していない。線路もすべて地下化されてしまい、整地されているため、訪れてみても駅があった気配は感じられない。

台北旧駅は現在、館前路と呼ばれる道路の北の延長上に位置していた。館前路は忠孝西路から南に伸びており、新光摩天楼大樓の脇を通っている。日本統治時代は表町通りと呼ばれていた。

この表町通りの突き当たりにあったのが旧台湾総督府博物館（現国立台湾博物館）である。正面にドームを抱く白亜の建物で、遠くから眺めるだけでもその威容は伝わってくる。旧台湾総督府（現総統府）や旧専売局（現台湾菸酒有限公司）、旧台湾総督官邸（現台北賓館）などと並び、日本統治時代の台北を代表する名建築の一つである。



旧表町通りの様子。現在は館前路と呼ばれている。奥に見えるのが国立台湾博物館である。

大都会のオアシス・二二八公園

台北二二八和平紀念（記念）公園は通称二二八公園と呼ばれている。ここは日本統治時代に台北新公園として開かれ、戦後も長らく新公園の名称で親しまれてきたが、陳水扁市長時代の1996年2月28日に改名されて現在に至る。

ここは「大都会のオアシス」という表現がぴったりとあてはまる空間である。台北に限らず、台湾の都市は人口密度が極度に高く、家屋が道路にせり出していることもあって、圧迫感が強い。もちろん、それゆえに活気があるようにも見えるのだが、こうした豊かな緑に触れていると、やはり心が和やかになる。この公園も多くの人々に愛されており、明け方から夕刻まで、散策を楽しむ市民の姿を見かける。

この公園の面積は71520平方メートル。開園は

1908年となっている。当時、台北には圓山に公園があり、そのことから、「台北新公園」と名付けられた。圓山公園が自然地形を利用したものであるのに対し、こちらは欧州式の公園となっていた。言うまでもなく、台湾初の都市公園であった。

後述する国立台湾博物館の裏手には池があり、その畔には日本式の石燈籠が残っている。一部が破損した状態だが、原型は留めている。なお、この池も戦前からあるもので、子供たちが遠足で公園を訪れると、必ずや橋上で記念撮影をしたという。この石組みの橋も戦前に設けられたものである。

さらに、1934（昭和9）年にラジオ局が設けた放送塔も古蹟として保存されている。この放送塔は大きなものではないが、屋根の部分に東洋的な雰囲気を感じさせている。一説には、これは神社の石燈籠を模して作られたと言われている。1945（昭和20）年8月15日正午には玉音放送もここから流れたと言われている。

また、公園の西側には屋外音楽ステージも設けられていた。これは現在も姿を留めている。戦後に改修されているが、場所は同じである。さらにその南側には小さな祠があるが、ここには菅原道真を祀った天満宮があった。

公園の敷地の南端近くには護国神社の神馬像が置かれている。脇腹の部分には桜に台湾の「台」



国立台湾博物館の正面には一対の銅牛が置かれている。これは仏教団体が寄贈したという説や、満州国が台湾神社に贈ったものとする説など、複数の推測がなされているが、詳細は不明である。



公園の南側には護国神社の神馬像が安置されている。しかし、解説板などはなく、その存在を知る人は多くない。脇腹の部分には護国神社の社紋を読み取ることができる。



ラジオ放送局が設けた屋外放送塔。石組みを模しており、堅牢な印象を与えている。現在、これは台北市が指定する古蹟に挙げられ、保存対象となっている。

の字を組み合わせた護国神社の社紋が今も確認できる。ただ、この神馬像がどういった経緯でここに運び込まれ、安置されているのか、そういった背景はすべて謎である。

二二八事件の悲劇を後世に伝える

二二八事件は1947年に起きた台湾の民衆による蜂起事件である。台湾史上最も凄惨な事件の一つであり、その後に中華民国政府が行なった白色テロ（蒋介石一派による反対派の粛清と弾圧）と合わせると、その痕跡は現在も台湾社会に根深い影を落としている。

事件は終戦後の混乱期に起こっている。日本に代わり、新たな統治者となった中華民国政府は支

配者として台湾に乗り込んできたため、様々な混乱が生じた。政府は日本人が残っていた資産を全て接収し、要職を独占したりした。

こういった横暴は各地で繰り返され、外省人と呼ばれた移入者たちへの不満が高まっていった。これに対して台湾の人々が立ち上がったのが二二八事件である。

事件の発端は林江邁という中年女性がヤミタバコ摘発隊に暴力を振るわれ、これに民衆が抗議。その後、旧台湾総督府専売局へ押し掛けたが、旧台北市役所では当局が民衆に向かって機銃掃射を行なった。これを受け、人々は台北新公園にあったラジオ放送局を占拠し、全土へ向けて蜂起を促した。

これは結果的に軍隊による徹底鎮圧を受け、その後、白色テロと呼ばれる言論統制の時代が続いていった。人々は言論の自由を奪われ、不当逮捕や強制連行、思想改造、拷問などが繰り返されたのは周知の事実であろう。

後述するが、このラジオ放送局の建物は二二八事件と白色テロの時代を後世に伝える博物館となっている。館内は1階と2階が常設展示空間となっている。台湾の歴史から当時の世相、二二八事件の概要、白色テロの実態、そして民主化の流れなどが紹介されている。



台湾銀行頭取の柳生一義の銅像があった場所には孔子像が設けられている。銅像は現存しない。



かつては明石元二郎総督と鎌田正威秘書官の墓地鳥居が移設されていた。2010年11月に本来鳥居があった旧三板橋共同墓地（現林森公園）に戻されている（2010年8月撮影）。

現在、公園の中央には二二八記念碑と呼ばれるモニュメントがある。ここでは毎年2月28日に追悼式典が開かれている。このモニュメントのすぐ脇に、かつて児玉源太郎の銅像があった。なお、公園内には児玉源太郎のほか、後藤新平と台湾銀行頭取の柳生一義の銅像もあったが、いずれも現存しない。

記念館として残ったラジオ放送局

二二八公園の中にはラジオ放送局だった建物が残っている。この建物は現在、「二二八記念館」と呼ばれており、二二八事件について紹介するスペースとなっている。戦後に何度か改修工事が施され、増築もされているが、その面影は今も残っている。

この建物は1931（昭和6）年に竣工している。設計者は台湾総督府営繕課の栗山俊一。スペイン風コロニアル様式と呼ばれるスタイルで、大きなバルコニーの存在が特色とされている。南国の強い陽射しを浴びて、ひとときわ明るい雰囲気をもたらす建物である。

建物を遠くから眺めると、生い茂った緑の中で、際立った華やかさを放つその姿が印象的だ。その様子は確かに南欧に見られそうな雰囲気でも、「スペイン風」という表現にも納得がいく。

しかし、屋根の部分に注目すると、瓦が配されており、東洋的なセンスが加味されている。また、公園内に設けられたことで、周囲の景観を損なわないよう、そのデザインは格別の配慮がなされていたという。壁は当時から淡黄色であり、窓枠には薄茶色のタイルが貼られていた。いずれも、樹木との調和を意識した色合いであった。

この建物は台湾におけるラジオ放送の拠点であった。当時、ラジオは重要な情報伝達手段であった。情報統制の厳しい時代、放送内容が台湾総督府のコントロール下にあったのは言うまでもないが、公的な情報を伝達する手段として重視されていたのは確かである。

戦後を迎え、国民党政府に台湾総督府が残した施設が接収された後も、この用途は変わらなかった。日本だけでなく、国民党政府にとってもラジオは重要な伝達機関だったのである。

二二八事件の際、民衆はここからラジオを用いて全土に決起をうながしたことはすでに述べたが、皮肉なことに、事件が終結に向かうと、今度は政府が制令を伝える手段となり、事件の処理状況を告知するために用いられた。

1972年にはラジオ放送局の新社屋が完成する。これと同時にこの建物は用済みとなった。管理は台北市に委ねられ、公園の管理施設となっていたが、それは遺棄された状態であり、もともとが優雅な雰囲気だっただけに、痛々しい姿であった。

二二八事件からちょうど半世紀が過ぎた1997年2月28日。ここは二二八記念館として再利用されることになった。現在は二二八事件と白色テロの時代を後世に伝えるべく、各種展示が行なわれている。

明るく開放的な雰囲気を漂わせたこの建物は、威厳と格式を重視した当時の官庁建築の中では異色の存在である。しかし、台湾が歩んできた道の一環を見続けてきた存在であることに疑いはない。ここもまた、確実に歴史の舞台なのである。



二二八記念館として使用されている旧ラジオ放送局。日本語教育世代のボランティア解説員もいて、日本人旅行者に人気を博している。

ドームを抱いたギリシャ風西洋建築

台湾総督府博物館は現在、国立台湾博物館として使用されている。外観は竣工時の様子をほぼ完全に保っており、古蹟にも指定されている。当時としては非常に珍しい古代ギリシャ建築を模したスタイルだった。

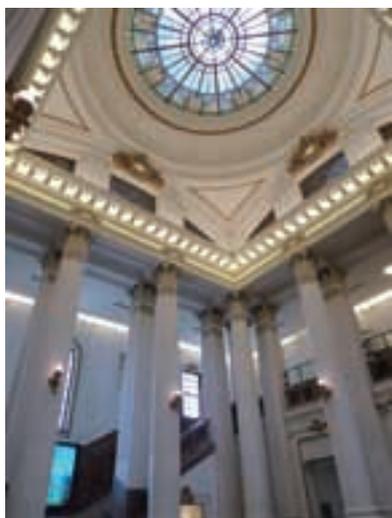
博物館は台北二二八和平公園の敷地内にある。鬱蒼と生い茂った南国の緑の中で、白亜の西洋建築がどっしりとした構えを見せている。天気の良い日なら、青空に外壁の色合いが映えて美しさを増す。その様子は亜熱帯特有とも言える雰囲気を感じ取れる光景だ。

台湾には博物館や文物館が数多くある。これらは1990年代後半以降に立てられたものが多く、長らく続いた言論統制の時代を経て、民主化と同時に興った郷土史探訪ブームに連動している。遺棄されていた老建築や立て替えが決まった日本統治時代の官庁建築などが博物館に転用されるケースもよく見られる。しかし、日本統治時代から一貫して博物館だったのはここだけである。

この博物館は殖産興業政策の一環として設けられている。1899(明治32)年に台湾総督府殖産局が商品陳列館を設けたことが契機となった。当

初、この博物館は第四代台湾総督児玉源太郎と民政長官であった後藤新平の偉績を記念して設立された。名称も児玉総督後藤民政長官記念館という名だった。

1908(明治41)年10月24日には台湾総督府博物館と名を改める。現在の建物が竣工したのは1915(大正4)年4月18日のことだった。初代館長には川上瀧彌^{かわかみたきや}が就任している。余談ながら、この川上という人物は1897(明治30)年に阿寒湖でマリモ^{まりも}を発見した人物で、和名「毬藻」の命名者でもある。



旧台湾総督府博物館。中央にドームを抱く白亜の建物で、吹き抜けのホールが自慢だった。設計は台湾総督府技師だった野村一郎の手による。

壮麗な雰囲気をもった大型建築物

この建物の正面に立ってみると、ギリシャ式の列柱と中央上部のドーム、そして正面の三角ペディメントが迫ってくる。この建物の主要部には大理石が用いられているが、これはすべてがイタリア産だったと言われている。現在、台湾は大理石の産地として知られるが、この建物に限っては台湾産の大理石は用いられていない。

玄関には大きな門扉があり、そこには獅子の像が据え付けられている。内部に入ると、吹き抜けのロビーに出る。窓から差し込んだ木漏れ陽が大理石の床に反射して美しい。

頭上には美しいステンドグラスがはめ込まれている。このステンドグラスは児玉家の家紋である軍配団扇と後藤家の家紋である藤を組み合わせた図案と言われている。これは似たものが中央正面の階段の欄干にも確認できる。

この建物の設計者は台湾総督府技師の野村一郎である。野村は日本統治時代初期の台湾で数多くの官庁建築を手がけた人物である。

やや余談となるが、野村は朝鮮総督府の設計にも携わっている。ドイツ人技師であるゲオルグ・デ・ラランゲの下、国枝博とともに助手という立場で設計を担当している。

基本設計はデ・ラランゲが行っており、野村や国枝の名が挙げられることはない。しかし、デ・ラランゲは朝鮮総督府竣工の12年も前に肺ガンで逝去しており、野村と国枝の影響が色濃いことは疑いない。実際、野村の代表作とされる台湾総督府博物館と朝鮮総督府は中央にドームを抱いていることや、ロビー正面に「Y」字型に階段が伸びていること、二階部が回廊状になってロビーを囲んでいることなど、構造的に類似点が多く、興味深いところである。

職員に守られた二体の銅像

ホールの左右には児玉源太郎と後藤新平の銅像が向かい合うように立っていた。この二体の銅像は北白川宮能久親王騎馬像をも手がけた新海竹太郎^{しんかいたけたろう}によるもので、終戦後の混乱期を経て、博物館の収蔵庫に保管されていた。

現在、この銅像は特設展示室に展示されている。詳細な日本語の解説文も用意されている。しかし、なぜこの銅像が残ったのか、その理由は今も謎である。かつて、職員が銅像を地下倉庫に運び込んだと言われ、その後、博物館が所有する収蔵庫に移されたという。

10年ほど前、銅像は博物館によって特別公開されたことがあり、筆者は2004年にも撮影の機会

をもらったことがある。この時は一階ロビーまで銅像を出してもらい、細部まで撮影できたが、銅像を運び出したという職員は捜し出すことができなかった。詳細は今も不明のままである。

この銅像は戦時中に実施された金属供出も逃れている。日本統治時代の銅像は戦後に国民党政府の手で撤去されたというケースが多いが、実は1943（昭和18）年から実施された金属供出によっても多くの銅像が溶かされ、砲弾などに化していった。とりわけ軍神・児玉源太郎の銅像はほとんどの場合、戦時中に撤去されている。

実は児玉源太郎と後藤新平の銅像は公園内にもあった。こちらは二体ともに戦時中に撤去の憂き目に遭っている。また、児玉源太郎の銅像はここ以外にも、台南州庁（現国立台湾文学館）前の大正公園内や高雄の寿山山腹、台中公園内などにもあったが、いずれも現存しない。後藤新平の像も同様で、ここ以外に存在しない。



児玉源太郎の像と向かい合っていた後藤新平の銅像。本来は写真後方の花瓶の場所に置かれていた。両者の銅像は公園内にもあったが、こちらは現存しない。後藤像は鼻眼鏡を付けており、足下には「大正三年新海竹太郎」と刻まれている。

豊富な収蔵品の数々

この博物館の展示物についても特筆すべき点が多い。

博物館には主に台湾に関する歴史文物や学術資料が集められていたが、その収蔵総数は一万点に

およんでいた。歴史、地理、風俗、動植物、地質鉱物、原住民族の文物にいたるまで、多岐にわたっていた。

また、日本による統治の軌跡にまつわるものも多い。たとえば、児玉総督が常用したという轎や北白川宮能久親王が台北滞在時に使用した寝台などが展示されていたと伝えられる。しかし、こういったものについては、戦争と終戦後の引き揚げ時の混乱などで、その後の行方は不明なことが多い。

収蔵品の内訳を見ていると、やはり統治者の視点からその保存価値が判断されており、展覧の姿勢が見え隠れしている。植民地における博物館というものは等しく統治者の視点で運営されるが、ここも台湾総督府が自らの治績を内外に宣伝しようとした意図が随所に感じられる。つまり、日本人が台湾統治の妥当性を強調するための空間だったのである。

しかし、見方を変えてみれば、台湾にまつわる文物を保存し、広く紹介してきた意義はやはり大きい。また、統治者の目線とはいえ、文物や収蔵品を民衆に閲覧させるという教育的な観点も注目に値しよう。そう考えてみると、この博物館の存在は小さくはない。

現在、この博物館を中心に、付近一帯の歴史建築群をまとめて「博物園區」として整備することが決まっている。

台湾、そして日本最古の蒸気機関車

博物館の屋外には二両の蒸気機関車が静態保存されている。これについても紹介しておきたい。簡素な展示室が設けられ、その中に蒸気機関車が置かれている。その様子は正直なところ、やや窮屈そうで、機関車自体も取り立てて珍しいものには見えないかもしれない。しかし、これは台湾のみならず、日本の鉄道史を語る上でも非常に重要な存在である。

左手の機関車は「騰雲^{とううん}」号と呼ばれるもので、

右手の機関車は9号機関車と呼ばれている。

騰雲号は1887年、台湾巡撫(知事)の地位にあった劉銘傳りゅうめいでんが鉄道建設に着手した際、ドイツのデュッセルドルフに本社を置くホーエンツォレルン社から輸入されたものである。

この機関車は基隆と台北が開通した1891年から使用されている。1895(明治28)年には台湾割譲によって日本に接収され、軍用機関車となった。これは1号機関車と呼ばれた。同型の機関車はもう1両あり、2号機関車、もしくは「御風」号と呼ばれた。ただ、こちらは1928(昭和3)年に引退し、解体されている。

9号機関車は、騰雲号が台湾初の機関車であるのに対し、こちらは日本を最初に走った蒸気機関車である。イギリスのエイボンサイド社製で、1872(明治5)年9月の新橋-横浜間の開業時、同線を走った10両のうちの1両である。当初は7号機関車と呼ばれていた。

この形式の機関車は全部で2両あったが、両者とも1901(明治34)年に除籍となり、台湾総督府へ譲渡されている。この時点で車齢は30年となっていたが、両機とも故障が少なく、高い評価を受けていたという。

しかし、この機関車の相方は台湾へ運ばれる途中で海難に遭ってしまった。大倉組所有の鶴彦丸は10月7日の午後4時半前後、五島列島沖で座礁。沈没してしまったのである。

そして、この機関車だけが台湾上陸を果たした。この時、台湾にはすでに8両の機関車が在籍していた。そのため、1906(明治39)年に9号機と命名される。その後は南部に運び込まれ、主に高雄(打狗)と台南の間を走った。そして、1926(大正15)年に現役を退き、除籍となっている。

この時、解体も検討されたというが、歴史的価値が考慮され、この場に静態保存されることになった。日本統治時代に撮影された古写真も残っている。この時代から引退した蒸気機関車を産業

遺産として保存するという発想があったことは驚きに値する。



左手の機関車は騰雲号。1887年にドイツのホーエンツォレルン社から輸入されたもの。9号機関車は台湾に残る最古の蒸気機関車。日本で最初に走った蒸気機関車でもある。

博物館へと変わった銀行建築

国立台湾博物館土銀展示館。ここは旧日本勧業銀行台北支店の建物である。日本統治時代に日本勧業銀行台北支店として建てられ、戦後は長らく土地銀行の店舗となっていた。現在は国立台湾博物館に移管され、展示空間となっている。

この建物は台湾において、台湾銀行本店とともに銀行建築の双璧とされた建造物である。日本勧業銀行の支店として設けられたが。実際は台湾における本店機能を併せ持つ店舗だった。

日本勧業銀行は主に農業方面の振興を支援するために設けられた金融機関である。台湾には5つの店舗を開いていた。現在はここ台北と台南に建物が残っているが、両者とも鉄筋コンクリート造りで、石組みの壁面が特色となっている。

これは戦前の典型的な銀行建築である。威厳を大きく強調し、道路に面して8本の大列柱が並ぶ。用材には花崗岩や大理石が用いられ、見るからに堅牢な造りである。竣工は1933(昭和8)年。設計は日本勧業銀行営繕課が担当したという。

外観に関しては、何よりも大列柱が存在感を示している。ここまで見事な列柱建築は台湾では珍しく、上方を見上げると、そこにはライオンの顔が彫られている。そして、建物の脇にはマヤ風の渦模様が付けられている。こういったアクセントも、この建物の風格を支えている。

終戦を迎えると、建物は国民党政府に接收され、土地銀行へ移管された。1989年には老朽化を理由に一度は取り壊しも検討された。しかし、この時は建築界が奔走して各方面を説得。取り壊しを免れたという。

ここ数年は放置状態となっていたが、現在は国立台湾博物館から「土銀展示館」という名称が与えられている。吹き抜けの館内には高い天井を生かし、恐竜展などが行なわれている。



名実ともに台湾を代表する銀行建築。どっしりとした重厚な建物である。壁面には装飾が施され、マヤ絵画を参考にしたという渦巻き状の装飾がある。



館内の様子。3年以上の歳月を経て修復工事は終わり、2009年12月25日に国立台湾博物館土銀展示館として再オープンした。高い天井を利用して、館内には恐竜の展示がある。このほか、台湾の銀行史を紹介した展示室もある。

旧三井物産株式会社台北支店

旧台湾総督府博物館の斜め前には三井物産の台北支店があった。この建物は昭和期に入ってから流行したオフィスビルのスタイルである。装飾の類はほとんどなく、すっきりとした印象の建物である。

三井物産株式会社の台北支店として先代のオフィスが建てられたのは1920（大正9）年のことであった。その後、1940（昭和15）年に建て直され、現在のものとなった。

建物はオフィスビルらしく、機能性を重視した造りである。外壁の色合いも非常に地味なものである。しかし、水平に並んだ窓枠と庇、そして、垂直に切り立った柱模様が幾何学的なデザインをなしている。また、地上からは確認しにくいですが、上部には尖塔のようなものが設けられている。

戦後は長らく、土地銀行が管理者となってきたが、ここ数年来、店舗としては使用されていなかった。現在は国立台湾博物館の管理下に入り、今後の整備が進められていく予定だという（続く）。



旧三井物産台北支店。現在は店舗としては使用されていない。オフィスビルらしい機能性を重視した建物だった。